

先代学芸員が切り取った「自然」

にしざわ ふみかつ
西澤 文勝(学芸員)

はじめに

大学1年生のころ、緊張しながら先生の部屋を訪ね、講義内容について質問をしたことがあります。専門書や雑誌が積み上がり、分厚い壁のようになった部屋の最奥に、分析試料の山に埋もれるようにして先生が座っていました。私の問いを聞くと、先生は「それならこの本だ」と言い、ほんの数秒、目を伏せて考えたあと、乱雑に見える書架の中から迷いなく一冊を引き抜きました。その所作の鮮やかさは、今でも強く印象に残っています。

置いた物の所在と意味を正確に記憶していれば、整理整頓に時間を割く必要はありません。個人にとっては、極めて合理的な環境です。しかし博物館においては、「先生の部屋」のように、個人の記憶や経験に強く依存したかたちで資料を配置することはできません。博物館資料は、長い時を超えて継承され、多様な利用者によって活用される知的基盤です。そのため資料は、担当者や利用者が変わっても同じ結果にたどり着けるよう、一定の原理と手続きに基づいて整理され、情報として明示化されている必要があります。これは、個人の内部にある知識を、共有可能で再利用可能な形式へと外部化する営みです。

切り取られた自然

自然史博物館には、自然から「切り取られた自然」が保管されています。もっとも、それは採取された瞬間の自然物が、そのままの姿で保存されているという意味ではありません。自然物は、標本化の過程を経る中で加工され、また時間の経過とともに劣化も免れません。自然史



図1. 笠間ノート(全26冊)の一部。

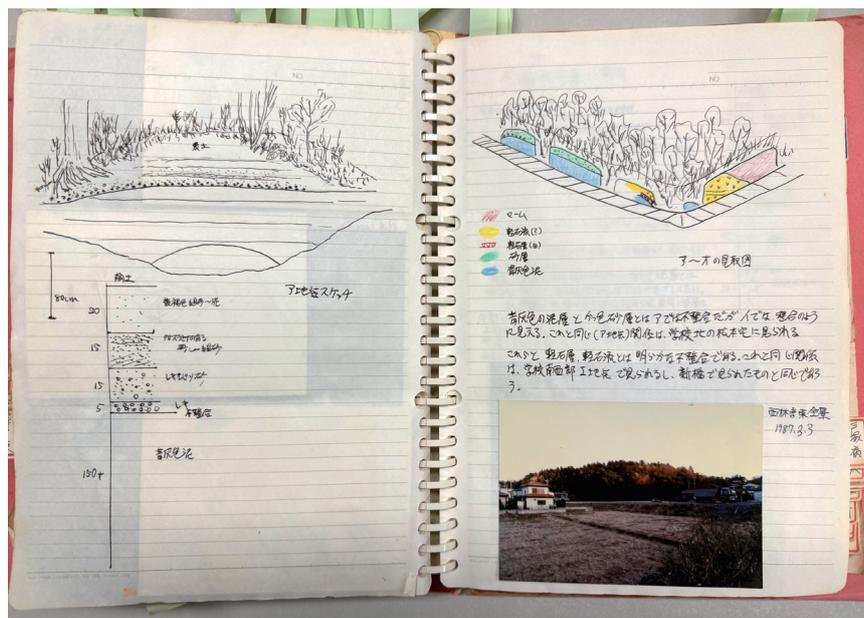


図2. 左ページ: 上部は露頭スケッチ, 下部は柱状図. 右ページ: 上部は露頭スケッチ(広域), 下部は露頭写真と解説.

博物館とは、そうした変化を前提としつつ、自然界に比べて時の流れを極力遅くすることで、標本をできるだけ長く保管しようとする場であるとも言えるでしょう。

この「切り取られた自然」には、実物としての自然物だけでなく、それをめぐって生み出された記述的な生産物も含まれます。文字による記録、スケッチ、写真、あるいはそれらを組み合わせた表現は、研究者や蒐集家^{しゅうしゅうか}が生涯にわたって自然と向き合う中で、副次的に生まれてきたものです。自然史博物館では、こうした生産物についても、その整理と保管が検討されています。

当館では、これらのうち画像資料—写真、細密画、地図等—については、比較的整理が進んでいます。なかでも、水中生態写真や標本写真から成る「魚類写真資料データベース」は、資料の共有と活用が可能となった成功例の一つです。一方で、研究者の野帳や研究ノートについては、それらをどのように整理し、管理し、公開していくのか、その基本的な枠組みから検討しなければならない段階にあります。実際、大学教員の退官を機に、研究者が長年にわたり収集した試料や研究ノートが寄贈される事例は、近年増加しつつあります。

これらをどのように資料として扱い、活用される情報として保管するかを考えるためのヒントがあります。冒頭の話で、先生の部屋のモノの配置がそうだったように、研究ノートの中身も、研究者の記録(記憶)の仕方が反映されているはずで、その癖を理解し、ノート内のどの箇所が資料として価値があり、共有可能であるか、どのような研究に資するかを判断・想定し、その情報を集中的に抽出してまとめるのです。

「笠間ノート」の重み

当館に着任してしばらく経ったころ、先代学芸員の笠間友博氏から、これまでに作成した研究ノートを博物館で活用してほしいとの提案がありました。多くが「巡検日誌」と題された全26冊を、以下では便宜的に「笠間ノート」と呼ぶことにします(図1)。これらは、1986年～2017年までのおよそ30年にわたり、同氏が神奈川県内を巡り、汗をかきながら集めた観察と考察の塊です。

笠間ノートは、地点ごとにページが区切られ、一定の構成に基づいて整理されています。おおむね、①地図(手書きを含む)、②露頭^{ろとう}スケッチ、③柱状^{ちゅうじょうず}図、④露頭の記載、⑤現像された露頭写真

(その解説を含む)から成り立っています(図2)。加えて、地形図のコピーや巡検案内書などが、糊付けされたり挟み込まれたりしている場合もあります。このように、観察結果と補助資料とが一体となって編集されている点に、笠間ノートの特徴があります。

なかでも特筆すべき価値をもつのが、現像された露頭写真です。写真は一次資料的な機能を有するとされ(瀬能, 2015)、撮影者による取捨選択や構図の編集を含むとはいえ、文字資料に比べて出来事や現象をより客観的に伝えるデータとして利用することができます。笠間ノートに収められた露頭写真や、スケールとともに撮影された火山灰層の写真の中には、現在では同じ場所で再び目にする事ができないものも少なくありません。これは、ノートが作成された当時、都市部において開発工事に伴う人工露頭が数多く存在していたことによるものです。露頭はしばしば「なまもの」に例えられるように、工事の終了とともに急速に失われてしまいます。

野外調査に基づく研究において、良好な露頭に出会えるかどうかは、研究の成否に直結します。その点で、笠間ノートを活用することにより、近隣に同じ火山灰層が類似した様相で現れる可能性を事前に見通せるため、追認のための野外調査を効率的に進めることが可能になります。さらに、仮に露頭そのものが失われていたとしても、写真から当該地点における火山灰層の厚さを読み取ることができれば、その分布を示す等層厚線図を精緻化するといった、より専門的な分析にも資することができます。

このような写真の一次資料的な活用が可能なのは、笠間ノートでは、撮影地点を示す手書きの地図やスケッチが写真と組み合わせられて編集されているためです。言い換えれば、同氏が一貫した記録方法を継続してきたことが、研究ノートを個人的な記録にとどまらない、再利用可能な研究資源へと押し上げているのです。

整理の方針

現在、笠間ノートについては、スキャンによる電子化を進めています。この作業

には博物館実習生の協力も得ています。電子化の主な目的は、先に述べたような活用を念頭に置き、火山灰や第四紀地質の研究分野において、参照可能な資料として利用できる状態を整えることにあります。電子化の対象は、前述した①～⑤の内容に限定し、ノートごとに作業を進めています。

今後、整理が進展すれば、たとえば特定の火山灰について、その写真がどのノートのどの地点で記録されているかを横断的に検索できるようにする、といった活用も構想しています。ただし、これは火山灰資料全般に共通する問題でもありますが、火山灰を同定し、固有名詞、すなわちテフラ名を付して保管する行為は、必ずしも中立的な操作ではありません。それは、何らかの観察結果やデータに基づいた、収集者自身の解釈を含むものです。

火山灰の同定方法については別稿(西澤, 2020)に譲りますが、笠間ノートに記されたテフラ名は、同氏が層相や層序の観察から導き出した判断にのみ基づいています。それらの同定の確からしさについては、笠間ノートがもつ資料的価値とは切り分けて考える必要があります。翻^{ひるがえ}って、そこには新たなテフラ研究が成り立つ余地、すなわち研究資源としての可能性までもが内包されていると言えるのです。

一方で、笠間ノートをどのようなかたちで、誰もが利用できる状態にしていくかという点については、現時点では慎重な姿勢を取らざるを得ません。原典へのアクセスを認めるかどうかを判断する際には、まず個人情報が含まれていないかの確認が不可欠です。露頭情報は、場所を特定できてはじめて研究上の価値を持ちますが、例えばその記録にあたって、「〇〇さんの家の裏の崖」といったような、きわめて個人的な情報が、写真とともに研究者個人のメモとして書き留められている場合もあります。こうした情報をそのまま公開することはできません。

「見立て」を引き継ぐ

現在私は、箱根火山におけるテフラ層序の高精度化に取り組んでいます。この



図3. 笠間氏との調査(秦野市市木沢).

研究を進める過程で、実は笠間氏にもご協力をいただき、失われつつある露頭情報の整理や、長年の調査を通じて培われてきた露頭における火山灰層の「見立て」を引き継ぐ機会を得ています(図3)。

ここであえて「見立て」という言葉を用いたのは、それが必ずしも論文に適した記載表現ではないからです。箱根の火山灰層を前にしたとき、どこに注目し、何を手がかりに層を読み分けるのかといった判断は、長年の野外経験の中で身体化された知識として蓄積されてきたものです。笠間ノートに記されたスケッチや写真、簡潔な記述は、そうした経験知が記録として定着したものであり、単なる観察結果の集積にとどまらず、調査者の視線や思考の軌跡をも伝えています。

笠間ノートの整理と活用は、こうした経験知を、個人の内部に閉じたものとして終わらせるのではなく、次の研究へと繋げるための媒介として位置づける試みでもあります。消えゆく露頭を前にして形成されてきた判断の積み重ねを、どのように記録し、どのように共有可能なかたちへと編み直していくのか。その問いは、箱根火山のテフラ層序研究という個別の課題にとどまらず、自然史博物館における研究資料の継承と活用のあり方を考えるうえでも、重要な示唆を与えるものだと考えています。

参考文献

- 西澤文勝, 2020. 広域テフラについて. 自然科学のとびら, (98): 6-7.
瀬能 宏, 2015. 生命の星・地球博物館における資料収集と評価の視点. 自然科学のとびら, (79): 2-3.

※なお、本報告はJSPS 科研費JP 24K16213の助成を受けたものです。